僕にはそんな勇気はない

「ねえ、どんなラブレターがええのかなあ。」
と僕は熱心に真面目な顔で聞いた。
お母ちゃんは、ニヤニヤして言った。
「思うままに書けばええ。
思っているとおりになあ。
言葉づかいよりもその心や。」
書いた手紙をお母ちゃんに見せる勇気はない。
書いたと言う勇気もなかった。
いくら考えても、どうしょうもないとわかった。
「学校の勉強もあり、
これぱっかりやってられん。」
結局、ほとんど直さず、そのまま、
きれいに、ゆっくりと、便箋に清書した。
そして、何度も読み直し、
封筒に入れて、内ポケットに入れた。
「初めて書くラブレターや、
暗記できるぐらいになっててても、
ええはずやけどなあ。」
しかし、なんか、自信ある文章でなかった。
「やっぱり、こんな手紙書くには、
僕はまだ若すぎるのかなあ。」

萩原良昭